

傾城三度笠



傾城三度笠

豊竹若太夫正本

二上り歌坂はてるゝ鈴鹿はくも。くもるヨイノ。あひの。土山。歌。歌てやるこれや此。行も歸るも。ナホスフシおなじ道。フシ知る人ふえて。宿々の。オクリとまりふのとめ女。旦那のお上りお下り。言ひつ言はれてはのきくも。金と色との二道に。迷ふは人の世やふかき。伏見の里の朝もよひ。氣もかるさんのきならしに。内と外とに一歳を。フシ半ばは馬の背に睡る。歌戀の重荷の乗掛馬や。此方の思ひは目に三度笠。夢も添寝の。フシ標野を過ぎて。よそに仇名の森口や。變らぬ色を松が鼻。今朝九重を立ちしより心は西に飛梅の。宰府もゑふも晩は早や泊りは。我が住家ぞと馬子も。三重いさみて。鈴が鳴る。フシ行來の駒の。地足音も若しや忠兵衛が歸りかと。待つ母親の氣も忠實に。ヤイ權太郎。風呂の下をけふらすな飯は炬燵に温めてと。世話を焼くやらしよさくるやら。フシ取まじへたる斗なり。地手代の三ぶは帳引寄せ爲替の銀の請拂。荷物物の請取狀の届け。朝むつくりと起きるから扱やかまじき商賣やと。暫し伸して大欠伸。誠に死病と口過とに仇なことはない。千兩取る役者も質屋から鏡をすはる。僭上な遊女も節季の白粉は薄く。飛脚の手代は金銀を腰に付けても。我が物にして抱いて寝たことはない。目に正月をさすぢや迄と。フシ烟草引寄せのみ居たり。地たる所へ其年は定かに見えぬ女房の。人目を忍ぶ綿帽子廿五六の男づれ。門口に立寄り手代の三ぶを手招きして。詞忠兵衛様はお留守かといへば。ム、成程お留守ぢやがそれが何とした。然らばお袋様に會ひましたい傳へて給へと有りければ。三郎兵衛不審して是は算用が違つた。旦那に會ひたさうなものがお袋様に會ひたいとは。扱は旦那が子がな孕ませて。頃日使りもない故に腹立まぎれに内儀様に。言うて恥

をかゝしよとの事か。それはあまり一興きまつな。如何いかに思へばとて江戸から會あひひにも來きられまい。此この粹すいが吞の込んだ今いまでも歸かへられたら取と持もて。産うま料りょうでも取とつてやろ。跡あとなは家け來き殿だんかもがり殿だんか。ゆすり等た食たふ三さん郎らう兵へい衛ゑいではない。出いようがよければ一步いっや二に歩ぽは取とかへてもやらう。何なんぶん今いま宵よは歸かへられよと言いへば。女に房ぼう打うち笑わらひ。地ちイヤ左ひだり様さまなものはござんせぬわしは大だい和わの姪めいでござんす。をば様に會あはせてといへばヤアおとら様さまか粗あら相あなこと。サアお通とほりと言いひければフシ二人ふには輿こに入いにけり。地ちをばは輿こより立た出て何なんとおとらか久ひさしやな。ようおぢやつたと言いひ度どいが是これは何なんとも合あ駈か行ゆかぬ。詞ま前ま方かたは互たがひに行い來きもしたれど。我わがが子この忠ちゆう兵へい衛ゑいと許ゆる婚こんして。おもて向むかひから結むす納なめをやつたれば此この方かたの秘ひ藏ざう殿だん。地ち迎むかひもやらぬに徒た既しで。しかも見み馴なれぬお連つれもある。ざりとは心こころもとない様さま子はどどうぢやと言いひければ。詞ま男おとこ腰こしを屈かめ。お前まへがおとらが伯おほ母はは御ごでござりますか私わが儀ぎは新あたら七しちと申まをして三さん輪りんの邊への者もの。是これなる女にとは三さん年ねん以前いぜんより人ひと知しれず夫婦ふうふの契せき約やくいたし。隠かくすことなれば親おや達たちにも御ご存ぞんじ無なうて。先まづ頃ころ御ご子こ息し忠ちゆう兵へい衛ゑい殿だんへ婚こん禮れい極ごくり。印しるしの樽たるも納なりし上うへは某たがしふつつと思おもひ切きり候まうへ共ども。女に心こころの一ひと筋ぢんに拙ちよ者ものに添そはずは身みも亡なすべきと歎なげきしが不ふ便べんさに。二に三さん日にち以前いぜんに所ところを立た退たいき候まうへ共ども。思おも案あんする程ほど一ひと大だい事じのこと私わがは内うち證しやうのちなみ。忠ちゆう兵へい衛ゑい殿だん爲ためにはおほやけの妻さい女によ。其そのの分ぶんにしてはござられぬ筈はず。見み付つけられ次つぎ第だいに科かに行いはれんは知しれたこと。然しかる時ときには一ひと門もん一ひと家けの恥ち辱じやくと思おもひ。互たがひに覺おぼ悟わ極ごくめし上うへ。恥ちを捨すて、今いま日にち是これへ參まゐりしも。他た人ひとなれば了り簡かんに及およばず。伯おほ母はは様さまと有あるを力ちからにて一ひと旦たんお詫わびに參まゐりたり。地ち二人ふにの者ものの一ひと命いのちは生なけうとも死しなそうとも。御ご兩りやう所ところ様さまの心こころまかせ存ぞん分ぶんになされても。ちをらてあらう道みち理り。伯おほ母はは君きみのお情なさけに宥なぐさ免めん有ありて給たまれと。フシ慇いん懃しんにこそ申まをしける。詞ま伯おほ母ははは聞きくより。何なん方かたかは存ぞんぜぬが發は明めいさうな御ご口くち上うへ。御お若わかい同どう士しのことなれば妻さいななし夫むなしの時とき分ぶんには。有あるまい事ことでも候まうはねばその所ところは咎とがめませぬ。今いまでは我わがが子この女に房ぼうと名なの付ついて有あるおとららをば。連つれ退たいき給たまふ御ご所ところ存ぞんは不ふ義ぎでないとは申まをされまい。地ち忠ちゆう兵へい衛ゑい宿しゆくに居いるならばこなたを只ただは歸かへすまい。しかし皮かわ引ひきや身みがつくと姪めいが不ふ便べんに候まうへば。隠かく密みつにしてやりませう互たがひにふつと思おもひ切きり。おとららを早く親おや里り

へ戻し給へと有りければ。おとらは側へにじり出て今日けふは參ること恥かしいやら怖いやら。胸がどきどき致しまし御挨拶さへ得せなんだに。思ひの外なる御了簡二人が命拾ひもの。有難いやら嬉しいやら申さうやうも御さんせぬ。此の上慾な事なれどとても事に巧をもあけて下さんせ。忠兵衛様も根心はわしを女房に持つことは。厭がつてぢやと聞いてゐる。其の筈のこと新町の梅川といふ女郎と。二世の起請を書いてぢやげな。其の水くさいお心と新七様の可愛いと。どうマア思ひかへられう主は男のことなれば思ひ切らうとの給へど私や何ぼでも成りませぬと。思ひの筋の遠慮なき。年より過ぎた通りもの。フシ田舎に京とぞ思はるゝ。詞伯母は聲を突らして。おぬしは何處の寺へ行て。其の徒は習ひしぞ。何と忠兵衛はいやにして新七殿がいとしいとや。伯母が前にてほてくろしい。眉目よう生れ付いた故人が惚れると思ふかや。今の世界の流行もの顔形より數金に。惚れる男が多いぞや。地左様な者の癖として。博奕うつたり藝好して。金銀のみか寢道具迄。げじてのけて擧句には無體なことを言掛られ。裸で逃げて戻るもの。思ひ切らうが切るまいが。此の伯母が切らせて見せうと。フシ疊叩いて言ひければ。詞新七詞を静めつゝ。只今の一言にちと言分も候へども。地高が我等が無理なれば言譯も要らぬこと。所詮かなはぬ上からは長居は無益サア立ちやと。おとらをやがて引立て。フシ表を指して出てければ。地伯母は暫しと押留め扱是非も無きことどもや。伯母が心の和らはずは死なうと覺悟極めしも。思ひ合うたり契りたり。我も昔は若木の花色も情も知りたれど。浮氣盛りの者同士が一花ぞめの色ならば。思ひ切るでもあらうかと叱つたことも憎口も。憎うと我は言はぬなり五十路に餘る老の枝。高座の上の談義にも子のなきことは殺生の。報いと示し給ひしを聞いて戻つて其の後は。鯉鮒さへも殺さぬを。老先遠き方々の命二つが取られうか。と有つてそつと赦しては心短き忠兵衛が。世間の恥て思はざる。歎きや見んと悲しけれ兎あればかゝりかくすれば。あらむつかしの浮世やと。暫し涙に咽びしが。何とか思ひ定めけんそばなる視引寄せて。さら／＼と書く三行半おとらが前に差置いて。詞二人の科も忠兵衛がうらみの品も年寄つた。我

が身一つに引請くる。泊つて行きやと云度いが。其の内忠兵衛が戻つては。地物事がむつかしい早う〜と言ひければ。命二つを御赦免の伯母の御教書戴きて。心しよぎ〜いそ〜と オクリ急ぎ、歸るぞ道理なる。地斯る所へ忠兵衛は財布を擔げ馬繫かせ旅巧者として疲れず。隣歩きの心して。ゆらり〜と歩み来る三ぶや權太立出て。馬の荷を解く草鞋とく。笠のメ緒もとく〜と フシ荷物は奥へ入にける。詞忠兵衛母に打向ひ。留守中御無事でござりましたか。扱々今年の様な寒い年はない。箱根の吹雪に當てられて。夜晝腹を痛めて難儀致しました。扱此の財布は伊丹の爲替金四百五十兩。地戸棚へ入れて給はれと言へど答へずんとして。物思はしき有様に。忠兵衛は訝かしくお氣難かしく御入か。なんぞ御機嫌損ねたかと。にじりよりにて問ひければ。詞母は涙を眼に受けて。いやはや興のさめたこと途方に暮れて居るけれど。どうで言はねば濟ぬこと嫁に貰うたおとら奴が。とうからくさり合うてゐる。其の男めとたつた今。連立つて失せをつた。憎うて〜己れやれ掴み付かうと思ひしが。年寄は涙脆い。死のゝ生きよのと歎くのを。地襲にも晴にも獨りの姪。見殺しにも成り難くつひ堪忍して歸せしが。其方には腹が立とけれど。了簡しやと有りければ。詞忠兵衛冷笑ひ。女と思ひめだれ見て。双物三昧致たるゆすりを一ツばい參つたな。地憎さも憎し追付いて。引戻さうと言ひければ。詞いや〜今のことではない。モウ半時も間がある。しかも了簡した上に。暇の状態もやつたれば何の歸らぬ昔ぞと。言難さうに紛らかす。忠兵衛肝を潰し。何暇の状を遣りしとな。母ちや人には聞えませぬ。私女房持つことは仲間の者に知らぬはなく。視儀の樽も二三軒から越しました。今更盗まれたと言つて一分が立ませうか。私は子ながらも他人。とらめは眞實のお前の姪なれば。地身共が廢る一分よりとらが難儀が御不便なる。あんまりそれは胸愆と。フシにがり切つてぞ申ける。地母も怒りの穂に出づる。顔を赤めていふ様は。ヲ、尤なり道理なり。よしなき者を哀みて口惜い詞をきく。其方が五つの時よりも廿年餘り親といひ。子となじみたる其中に。何の隔てが有るものぞ。二人の者に憂目を見せ其方が手柄に成るならば。何しに只是歸すべき言譯するにあら

ねども。其方と一夜の枕をも並べた上の事ならば。不義とて人も笑ふべき。知られず知らぬ古への。馴染と聞けば憎からず。十人寄れば取々の賞めそしりさへある物を。一門中のことなれば互に萬隠し合ひ。波風立たぬがよい筈と心一つに圖ひしも。眞實の子と思ふ故。心安さの餘りぞや其方が心に自らを。常も他人と思へばこそ。思はぬ恨みも請けしぞや。其心なら折ふしに。面倒がつた事あろう氣儘なものと思ふらん。あゝ辱かしの年月や今宵一夜は待合せ。明日は早く自らが駕籠走らせて大和へ行き。暇の状を取返し。二度歸らう歸らずば。フシ得取らぬものと諦めて。親子の別れと思へやと恨ながらに立給へば。詞忠兵衛袖に取付きて。あんまり腹の立つまゝによしなき事を申掛け。御機嫌を損うて千萬後悔致すなり。地誠の親と存ずる故斯様に慮外も申すなり。とらめが事は兎も角もお指圖次第に仕る。お腹を休め。フシ給はれと氣の毒。さうに言ひければ。地母も顔色直りつゝ。ヲ、それでこそ我が子なれ。アノ淫奔なとらめより。地百層倍もよい女房を。呼んでやろうと幼児を。賺すやうなる挨拶に忠兵衛じつと畏り。詞其お詞に甘へ早速なれどちとお願ひがござります。さる女郎とふつとした。夫婦の様な儀を致し置候。地あはれ御許しあれかしと。フシ笑顔作るも可笑けれ。母も聞くより打笑ひ。詞此方から無心言うたれば其方の願ひもかなへる筈。然し其梅川とやらには。其方が懇志な利右衛門殿と。何時の間にやら深うなり身請の相談極りて。手付の金子卅兩内より盗んで出られ。一昨日から歸られず。親達は腹を立て勘當するの追出すのと。地内はどやくやませるげな此女郎めはおとらより。十越して憎いやつ。ア、いや〜とぞ言はれける。地忠兵衛はつと思ひしが左あらぬ態にて。高が賣物店屋者もさらりと止めまして。年明けてからわつさりと惠方の方から呼びましよと。言へば母には悦んでそれよそれよと言捨て。フシ寢所にこそは入にけり。地忠兵衛暫し呆れつゝ茫然として居たりしが。暫く有りて横手を打ち。知れぬは人の心かな茶臼山には天狗が住むとも。梅川が心は變るまい。堀江の川より人魚は出るとも。利右衛門との懇意は切れまいと思ふたが。ようも〜二人して。我をまんまと騙したな。おとらが事は當分の腹立。殊に他

國に住むからは人も知らぬ。今宵の今迄女房と思うたを。友達の内儀ぢやというて見ては居られまい。よく／＼我を白痴と見すかしたればこそ。請けうとも言へ請けられうともいふ。己れ畜生同然の不義者めら。切つて捨る刃物がな。江戸戻りの土足にかけ。暗殺さんと駆出しが。又立歸り思案して。死なうと躍り狂ふとも亭主や鞘間に支へられて。銀づくの請開きに成る時は。無いと言つては濟むまいと。邊り見廻し戸棚なる。錠ねぢ切て最前の。革財布取出し。利右衛門めが何程に張合かけてきを共。此金にては埒が明く。しかし是亦分別所。人のものをかすめるからは。我が首はないもの。命に替へて一分立てうか。イヤ無念を堪へて命を生きやうか。サアどうせうか斯うせうかと。金の脈取り地脈取り。死脈が打つて進むやら。つまる所が分別を。むの字の形にかたづきて貧の盗みはいらぬもの。戀の盗みはなき跡の人の噂も憎からず。己れ只今踏込んで二人が面をはりかへの。提燈さげて蠟燭も一寸先は闇の夜や。肌三途のかはせ金。娑婆の身請の手付とは後にぞ。三重思ハ知られける。

中 之 卷 へ 生 顔 野 へ の く ろ は ぶ た へ

津の國の。難波の事か色ならぬ遊び戯れまでといふ。中に情の様々や。南の岸に寄る波の浮かれて身をや捨小舟。待つとはなしに曾根崎の。遊女に身をうつ。フシ客も有り。戀の誠の塊は靡と粹が定め置く。世間の意氣地友達の義理一遍に利右衛門は。首尾揃うて金捨て、夜晝はまる此里の。思はくならぬ手枕に炬燵の内は好ましき。闇がりなれど遠慮して足さし合ず帯解かず。囁く事も他所目には。フシ姑ましけれど戀ならぬ。地忠兵衛が所存姑の。ためなほされぬ氣の毒を。愛名の數に取添ゆる。フシ名代男ぞ氣詰りや。地花車は座頭の手を引いて片手に持ちし取さかな。隣で酔うた酒機嫌辰巳上りの聲をして。詞これはマア餘りなこつてり自慢。夜晝三日が間聲も立てずに寝てばかり。只今でも御金が渡つてお歸りあればお宿の花。頭の雪と見ゆる迄すひついてござんす御縁。此里の名残にわつさ

りと酒も上げなしたし。梅川様のお氣に入の清都の三味線を。又開きに御出も稀にあらうと思つて呼びにやりました。地聞の盃二世三世仲人のわしが橋渡し。お一つのんで上げますと會釋をすれば清都は。やがて商賣畏り榮華の春の一節や。小歌謡昔々つとのむかし云置きし。浮世のたとへ世話詞。なん／＼並べて。フシ申すべし。すぎわひは草の種。稼ぐに追ひつく貧乏なし。貧すりや鈍する長はんがあてのみ。雁は八百矢は三本。闇の夜の磯。牛に引かれて。フシ善光寺詣り長者の萬燈貧女の一燈提灯に釣鐘。膝とも談合。立寄らば大木の蔭。暑さ忘るりや蔭忘る。法論味噌の夕立。出る杭が打たるゝ出る／＼杭が打たるゝ。藪に萬巻敷から棒おたから棒。ふりこめさ／＼。兎角蹴れ遊べえ。調利右衛門につこと打笑ひ。日頃の馴染み梅川を祝ふ小歌の一禮に。地紙花なれど今日明日の雨露の恵みに正眞の。さかりをばつと見せうぞと兩人が手に渡すれば。貰うた時の地藏顔忘れた時の閻魔顔。まづそれ迄の樂みと笑うて。内に入りにけり。地かゝる所へ亭主の喜平治外より歸り。利右衛門が前に畏り。調用事ありて先程新町筋を通り候へば。梅川様の親方樋屋の半兵衛呼び込んで。身請の金はなんとする。肥後の御客へ遣はせば昨日に小判の顔見るに。其方が爲とて歎く故不承を堪へて待てばとて。餘りと言へば不埒なこと。今晚中に埒明かすば右の約束變改と。以の外に腹立ち候。尤も其方様からも。卅兩といふ手付は請取候へ共。地何とぞ今宵か明朝迄銀子お渡しあれかしと。フシ伺ふ顔も氣の毒なり。調利右衛門聞いて。尤々。斯様に延引致す筈はなけれど。親父が手前不首尾故。内から銀が出しにくさに今日迄は不埒せし。然し先程さる方へ無心を言うてやつたれば。明日用に立てんとの事。地先づ悦んで給れやと誠しやかに言ひければ。喜平治大きに悦んで扱も目出度き御事かな是にてさらりと夜が明けた先づ女房にも此通り。咄して安堵致させんと。フシいそ／＼として入りにけり。地二人は顔を見合せて暫し詞も出でざりしが。梅川云ふ様ざりとは急に成りました。どう思案して給はるとうろ／＼涙に問ひければ。調利右衛門溜息ほつと吐き。當座退れに深く言うて今宵はのがれたが。始終がどうもつまらぬ事今更悔みて返らねど。此方が心

底忠兵衛が所存もかねて知りながら。外の男に請けさせては思ひやるさへ笑止さに。こんな時こそ友達の役と思つて忠兵衛に。地問ふ迄もなく留守の間について請出して兩人が。悦ぶ顔を見よ物と思ふ一つの出来心。内の不首尾に支へられて僅の金子に手詰る事。中々言ふも。フシはづかしや。地恩が仇とは斯様なこと生中な事仕出して。世間の取沙汰忠兵衛が無念の上に面目を。失はするもわれが科宿へ歸りてのめく。人に面が合はざりよか死んで言譯立つならは今でも命は惜しまぬとさし俯向いてゐたりけり。地梅川聞くにせき上ぐる涙をやがて紛かし。扱れからぬお心ざし何時の世にかは忘るべき。必ず斯様な時節には障の出来る物かして。年の内には五度三度心中するも金銀の。不埒と。聞けば世の習ひ身にも人にも恨なし。我々故に此方さんの身にもかゝらぬ御事に。お宿の首尾の損ねたが。何より先は。フシかなしけれ。地明日にもぬしの戻られたら此頃内のお世話の段。くれぐれ語り悦ばん忠兵衛殿に會うたらば。又よい思案もあらうもの左程苦にする事ならずと。思ひ込めたる心の底包むとすれど何處やらが詞のはしの氣遣ひさに。利右衛門いと氣の毒の。病が出て此處らにてとんと死に度い〜と云うて。前後に暮れにけり。地然る所へ忠兵衛。梅川がある茶やは嶋屋と聞てせき來り。詞梅川殿のお客利右衛門殿が爰にの由。太鼓を持ちに忠兵衛が來たと傳へてくれといふ。地花草は挨拶目慢にてお淋しがつてあつたのに。よう御座んした奥の間へお通りあれといふ聲を。利右衛門聞くより南無三寶忠兵衛が尋て來た。面目無うて會はれぬと。フシ炬燵の。内へ隠れける。地女郎は忠兵衛を見るよりもづか〜と走り寄り。詞ナウ待ちかねてゐましたと抱き付くを突倒し。地折れよ碎けと踏む足もフシ震うて物は言はざりし。地梅川はきよつとしてナウ怪しからぬ機嫌ぢやが。氣が狂うたかさりとてはどうぞ〜。と言ひければ。詞忠兵衛聲荒らげ。ヲ、怠惰者の心からは氣狂ひとも思ふ筈己れが様な徒ものを斬つても突いても某が。すたり果たる一分の中々相手に足らぬなり。サア請出すといふ男めを何處へ隠した引出せ言分有ると呪め付くる。地女郎やう〜起上り扱は身請の概略を。聞きはつりての腹立かそんならさうというたがよい。それに就い

ては利右衛門様段々のお世話にて。お宿の首尾も構はずに夜晝是にござんすに。會うて御禮を言はんせと少しも急かぬものごしを。詞忠兵衛冷笑ひ。さすがは傾城程有つてよう打明け白狀した。地たとへ己れが會はせぬとてのめめと歸らうかと。蒲團まкруれば利右衛門は。其方の方へ目もやらす押俯向いてゐたりけり。地忠兵衛側へどうとすり扱も初んな御大臣か。ほふるのは梅川と口説を我に取りもてか。詞ヤイ其處な不屈者。義理差合を辨へるが傾城買の一徳ぞ。人のわけくふ好色は面桶くるひと名を付けて。人間なれば乞食の所作。畜生ならば犬と猫。地よい獸も嗜むこと。お主も男のきれなれば。かく雑言を言はれては堪忍ならぬ筈。覺悟をせよとつめかくるを。利右衛門驢がず打笑ひ仇し男に面目を。失はせたる我なれば當言言はうがた、かうが。さら／＼腹は立たぬと言へば忠兵衛いよいよむつとして。思ひの儘に陥付けて格恰らしい挨拶は。我をなぶるか乗せるのか。又氣色に恐れつゝ此場を逃げて退く爲か。勤なれども女房と。契つた中を知らながら眼を盗んだは間男よ。首並べんと脇指を。抜きかける手に繩りつきやれまてそれは了簡違ひ。詞其方と我が懇切は兄弟よりも深い中。身の大事をも語り合ひ心の底も知りながら。不義ななどとは曲がない。其方が留守に梅川が身請と聞くと身が燃えて。小判の二百や三百は夜が夜中も調ふと。地言ふを自慢にし、かゝつて孔子くさした事なれば。話をするも恥かきさに返答はうたぬなり。取上したる心から氣の廻りたも道理ぢやと。紙入よりも一紙を出し。詞コリヤ此手形はな。梅川が親里へ路銀をやりて呼下し。娘を其方に呉れるとの證據に取りし詫文の。當名は龜屋忠兵衛と書かせて置いたも其方が爲。地是でもおれが誤りかと忠兵衛に扱付ければ。はつとばかりに押戴きかねての所存知りながら。持病の短氣が差起り悪口ばかり言散らし。扱迷惑などせうと頭を掻いっ手を揉みつ後へ引けば梅川は何と我が身が徒かと。恨みかゝれば氣の毒がりはて忙しないどうぢやいの。其方が恨みは内證事片一方から詫言の取次頼むと戯れて利右衛門が膝に頭を付け。唯堪忍とばかりにてスエテ手を合。せてぞ拜みける。地利右衛門顔を和らげてお主と我が其中に。どうしたことをいうたとして心に障る事

はなし。思案する程梅川を外へやりては其方へ。どうも一分立たぬなり假令五年が十年でも。身請の埒を明くる迄廓の門は出てまじと。フシ思ひ込んだる氣色なり。地忠兵衛膝立直し其段ならば安堵せよ。身請の金子餘る程則ち持參致せしと。小判を出して見せければ利右衛門大きに不審して。詞其大分の金子を是其方が分にて何として。才覺はしたことぞ。されば是には話あり天道人を殺さずちや。今度上りの道連に然る歴々と連立しが。地長道中の憂さ晴し一抔酒のお相手に。淨瑠璃小歌色ごとの話してとんと取入りて。身の上の事話せしに二言も言はず此金を。使へというて貸されたと速意つげなる間に合も。舌三寸の誤りに。フシ五尺の身をば亡すと。地知らで利右衛門悦んで亭主々々と呼立て、小判の山を見せければ。ヤレお目出度やお盃勝手の手行燈かき立て。祝儀は鮎の御吸物下を炊くやら椀拭くやら。金で庭掃く樋屋へと亭主は急ぐ利右衛門は今宵は歸りわが宿の。首尾繕ろうて明日ははや。駕籠を作らせ兩人を。迎ひに來うと戯れて悦び我が家に歸りけり。地女郎は心いそぐと立ツたり居たり拜んだり。愛染様への御無心もさらりとやめてあしたから。飛脚の神は知らねども達者な様に仁王様。信心したがよい筈ぢや何かを置いて來月は。有馬へ入りて赤子産んで成人したら嫁呼んで。夫婦は外へ隠居して參り下向で暮さうと心にたむ百年の命も今日か明日かとも知らぬ忠兵衛は無常氣であへんどうたず戯れず。炬燵に顔を倚せつゝつくぐ物を思ひけり。地女郎は少しむつとして。世の諺に嘘がない女房と名がつくとはや。愛想が盡る物ぢやげな。殊に近々御内儀を。呼ばしやんすのもきいてゐるかたを背中へ結んでも。女夫は女の手柄にて何程榮耀に暮しても。妾と言へは何處やらが足らはぬやうに思はるゝ。年越の夜や七夕は必ず一人寝しさうなもの。樂しみもなきかた様が可愛といふも蟲の所爲。斯ういふさへもいやさうなと。フシ呪む尻目も物ぞうき。地忠兵衛は聞くよりも女房持つて聞きながら。今迄知らぬ振せしはざりとは深き心かな。跡になりたる言分なれど女房呼ぶも敷銀に。心のつくは慾ならで其方を身請の胸算用。桁が違つてそれも今日さらりと去つてしまふたりや。女房といふは其方が事母も大分合點なりや。追付内へ呼入

れて随分大きな顔さしよと。騙すを知らず梅川はそれは誠か眞實か。お袋様へお土産には菓子か酒かと氣を配る。フシ女心の果無きも。フシ賢き人も。留まらぬ市の假屋の一騒ぎ假の此世と觀ずれば。思はず出づる念佛の。詞ア、南無阿彌陀佛くく。地聲も哀れにはなへ入る。心迄くる涙川。フシ堤も。切れてむせ歸り。詞やれ女房よ梅川よ。此有様を何に似た。物とも今日は知らずとも思ひ合はさん其時は。念佛申し手向よや。まつ此様にわれが身は野邊の枯木の木守と色は替りて朝夕に。いとし可愛と締ためも鳥の嘴に食ひこぼし。血潮は染むる千日の嵐の野邊の草むしろ。夜すがら撫てし肌をも煩惱の犬くひ散らす。身の行末の悲しやと覺えず。泣いて語るにぞ。地梅川何の辨へなく扱いまくしき物語。どうぞ覺の有る事か包み給ふは聞えぬと。ステテ縫り付きてぞ泣き居たり。地忠兵衛心を取直し敷くは道理ことわりや。詞今は何をか包むべき。最前渡せし身請の金。人に借たと話せしは皆偽の爲替金。地盗んで内を出てたれば二度歸る心はなし。何處如何なる奥山に暫しが程は隠るとも。多き仲間のことなれば遂には探し出されて。憂目を見んは知れたこと覺悟でしたる事なれど。其方が歎きを見るならば未練な心や起らんと。隠せしも亦。フシはづかしや。地斯くとは知らず相思ふ妹背の中は萬世や。龜屋忠兵衛が女房と頼みにせしが不便やとたまさめんくと泣きにけり。地女郎は呆れ惑ひつゝ扱恨めしのお心や。誰に添へとて自らを命の仇の金出して。身請と思ひ立ち給ふそれとは知らず露の間も。勇みし詞果無しな。主様とても我とても人悪しかれとは思はぬに。思へば過去の敵同士。互に惚れつ惚れられた報いを返すと思ふぞや。今は泣いても悔みても歸らぬ夢の浮橋や。渡り比べて今ぞ知る。千歳の契交すとも別れとなれば辛からん。一言なりと女房と呼ばれしを只思ひ出にとても迷れぬ道ならば隠れ忍びて添はんより。死出の山路の旅よそひ。永き契りをかはずべし。最期を急ぎ給へやと。フシひれ伏し泣くぞ哀れなる。地忠兵衛とかく諫めかね。先づはうれしき心ざし。あの世で添はるゝ物ならば。何しに跡に遺すべき悲しきは只我が身の上。科を正してあらけなき双の下に消え行かば。地獄とやらん恐しき鬼の筈の下に伏し。假令一ツ所に死ね

ばとて相見^{あひま}る事は叶^{かな}はぬなり。一門共も疎^そみ果^はてとひ弔^{なぐさ}ひも致^{いた}すまじ。其^{その}方が誠^{まこと}の心ならば尼^にともなりてなき跡^{あと}に。
 残りし野江^{のえ}の黒髪^{くろかみ}を拾^{ひろ}ひ集^あめて烟^{けまり}とし。回向^{まがき}の鉦^{かね}を聞^きかせよやそれを力^{ぢから}に成佛^{じつぶつ}し。末期^{まきご}は遠^{とほ}く隔^{へだ}つとも夫婦^{ふうふ}の縁^{ゆかり}は蓮^{はす}
 臺^{たい}の。半座^{はんざ}をわけて待^{まち}つべしと謙^{けん}しても亦^{また}いやおの。答^{こたへ}もあらず荒磯^{あらいそ}の。フシ涙^{なみだ}凍^こらぬ斗^{たけ}なり。地^ちかゝる折^せふし中^{なか}
 間の者^{もの}。忠兵衛^{ちゆうべゑ}有家^{ありか}喫^く出して理^り不^ふ盡^{じん}に駈^{かけ}入^いるを。利右衛門^{りゑもん}跡^{あと}より追^{おひつ}付き間口^{まぐち}に立^たふさがり。詞^{ことば}やれ待^{まち}て方々^{たたく}。大事^{だいじ}を
 仕出^{しし}す不^ふ敵^{てき}もの。死^し狂^{きやう}ひして一人^{ひとり}でも。地^ちかすりて負^おうて入^いらぬもの我^{われ}には心^{こころ}許^{ゆる}すべし。騙^{だま}して爰^{こゝ}へ連^つ出^ださんと。
 フシ言^い捨て奥^{おく}へ走^{はし}り入^いり。地^ち忠兵衛^{ちゆうべゑ}に睨^{にら}げばはや仲^{なかつ}間^まへも知^しれたとな。是非^{ぜいひ}に及^{およ}ばぬ是^{こゝ}迄^{まで}と脇^{わき}指^{さし}に手^てを懸^かくれば。利
 右衛門^{りゑもん}其^{その}儘^{まま}抱^かきとめて何^{なに}時^{とき}死^しなうと儘^{まま}なこと。一先^{いちせん}爰^{こゝ}を立^た退^ひきて一日^{いちにち}なりと梅^{うめ}川^{がわ}を。女^{めづ}房^{ぼう}に持^もつて榮^{えい}華^かせよ。跡^{あと}は
 某^{たが}請^{まが}取^とた。退^ひけよと引^ひ立^たれど。忠兵衛^{ちゆうべゑ}ちつ共^{とも}動^とかずして一旦^{いつたん}二^にた^たん段^{だん}々の恩^{おん}を請^{まが}けたる其^{その}方^{かた}に。難^な儀^ぎをか
 けては生^い甲^か斐^ひなし離^{はな}せ。とせき狂^{きやう}へば。利右衛門^{りゑもん}大^{おほ}きに腹^{はら}を立て。我^{われ}を我^{われ}とも思^{おも}はぬ故^{ゆゑ}。斯^か程^{ほど}の事^{こと}を最^{さい}前^{ぜん}に包^かみし段^{だん}が
 恨^{うら}みなり。おぬしが今^{いま}度^{たび}の過^{あや}ちも言^いはゞ身^み共^{ども}が梅^{うめ}川^{がわ}を。出^いしそこなうた故^{ゆゑ}なれば。地^ち汝^なが科^かは吾^{わが}が科^か。是非^{ぜいひ}々々^{々々}止^とらぬ覺^{かく}
 悟^ごなら。某^{たが}先^まに腹^{はら}切^きらんと同^{おな}じく刃^{やいば}物^{もの}に手^てを懸^かくれば。忠兵衛^{ちゆうべゑ}はつと涙^{なみだ}をこぼし。命^{いのち}にかけての心^{こころ}ざし無^な下に致^{いた}さう
 やうはなし。そんなら落^おちて見^みようかと。屋^や根^ねを覗^{のぞ}き裏^{うら}を見^みつ。其^{その}處^{ところ}か此^{こゝ}處^{ところ}かと立^た睡^{すい}く。利右衛門^{りゑもん}きつと思^{おも}案^{あん}して。
 炬^{たき}燵^この炭^{すす}櫃^び引^ひ上げて是^{こゝ}よと睨^{にら}げば。梅^{うめ}川^{がわ}を抱^かき下^{くだ}し續^ついて忠兵衛^{ちゆうべゑ}飛^とび入^いりしが跡^{あと}振^か返^{かへ}り。利右衛門^{りゑもん}が顔^{かほ}を打^う守^{まも}り
 手^てを合^あせ。朋友^{ともだち}の縁^{ゆかり}盡^つきせずは再^{また}び會^あうて語^{かた}るべし。落^お行^ゆく方^{かた}は大^{おほ}和^わの國^{くに}落^お付^けいたなら六^む道^{だう}にて。早^{はや}速^{すみ}御^{おん}禮^{れい}申^{まを}さんと
 言^いはせも果^はてず脱^{だつ}め付^けて。詞^{ことば}やれうろたへもの。そんな粗^そ相^{さう}な根^ね生^{こん}ては身^みの行^{ゆく}末^{すえ}が覺^{おぼ}束^{つか}ない。頼^{たの}む頼^{たの}めと言^い交^かす義^ぎ
 理^ぎ違^{ちが}へぬは武^ぶ士^しのこと。斯^かういふ我^{われ}は町^{まち}人^{ひと}ぢや我^{われ}が身^みに難^{がた}がかゝる時^{とき}。血^ちに迷^まうたらあらゆること白^{はく}狀^{じやう}せまい物^{もの}でも
 ない。命^{いのち}を的^{たて}の當^{あた}所^{ところ}問^{もん}はず語^{かた}りは何^{なに}事^{こと}ぢや。大^{おほ}和^わへ行^ゆくと思^{おも}ふなら幡^{はた}磨^まへ行^ゆくといふものぞ。東^{あづま}の旅^{たび}に赴^{まを}らば長^{なが}門^{かど}へ
 下^{くだ}ると書^か遣^やせ。足^{あし}弱^{よわ}連^つれて口^{くち}論^{ろん}すな道^{みち}を急^{いそ}いで夜^よ道^{みち}して。物^{もの}した物^{もの}を物^{もの}せられな。時^{とき}刻^{とき}が移^{うつ}る早^{はや}や行^ゆけと名^な残^{ざん}の顔^{かほ}を

振向ける。門出の道死出の道。火宅を出る冷炬燵もとの如くに取直し。居ぬはく〜と聲上ぐれば。大勢一度に込入つて納戸にも居ぬ湯風呂にも。居ぬはく〜といふ聲は下屋に響く地雷。臍隠すやら撮むやら。闇きに入りて闇がりの峠を指して 三重落ちて行く。

下 之 卷 へ道行人目のせき

まゝならぬ。世に生れ来て憂き事の。其中々や色の道引けど離れぬ煩惱の。慾と悪との三筋町。スエテ流れに淀む梅川の。淵は瀬となる飛鳥川。フシ掻けどす〜と。身の垢の。落ちて行方をくろめんと。黒縮緬の一樣に。石持月は霜月の變まじりにふる雪を。打拂ひ〜。アミドオクリ二人へ連立つ後や先。フシ知る人忍ぶ。菅の笠。前傾きに着なしても。何處やら粹な抱へ帯。フシそれとは誰もしら出立ち。東の方もしら〜と。しら玉造り札の辻。野はづれ頃は人顔も見ずや。見せじと袖口に。眼の下隠す法妙寺。晨朝の鐘現にも。小オクリなまみだ。鉢叩懸路の闇の晴れやらぬ。闇き浮世の。闇きより。闇きに迷ふ。フシ娑婆世界。猶愛しさに行道を。頼まずとても彌陀佛助け給へとフシふし拜み。地此頃つもの憂き思ひ語るに盡きず語る間も。泣暮したる年月の情重なり今ははや。我が故里へ伴ひて一日なりと世帯して。祭文朝茶わかする釜のざと。オクリいへば梅川。フシ氣に懸けて。地それはお俊の祭文歌ア、氣懸りと耳塞く。誠にさうよさりながら請出す其方を連退くは。末世は知らず今の世に又有るまじき身の上を。難波の町の讀賣に語り盡せと言ふ事か。繰歌舞伎の諺の。種に残して置く霜の。露塵厭はぬ身なれども。二上り文彌宿世如何なる機縁にや。見初めしよりも身に添ひて。月こそ出れ葛城の。よる〜毎の假枕。二人並べてよしあしの。ツキユリ口説も今は忘れ草。むかし。がたりと成果つる。フシこゝ松原の。長堤煙草のまん和煙管筒。片手に火纏片手には。ハツミくゆる煙の。わが。思ひ。誰が身の上も此如く。果は煙と成る物を。悔むは愚痴と吸殻を叩く拍子に雁

首の。ステテ落ちて喫むべき様もなし。地男は肝にこたへても素知らぬ顔に物言はせ。先で休まん此方へと色オクリ心ぼそくも。辿り行。フシ闇がり峠。のぼり坂二人手に手を。へ取かはし。歌心安かれ當麻へいたら。何時が何時まで居ようと儘ちや。さのみくどく思はずと道急ぎや。先には親の有るものと。いさめ立つればそりやそもあるが兎角定めぬ。フシ身の上と。泣いても歩み笑うても。歩む姿ぞ見すばらし。人目忍べばいとどなほ。往き來る人の見返りて所目なれぬ取なりと。後指さすうたてさよ。歌申しこれなうさりとては。わしが身とてもまゝにはと。末は涙に果しなく。オクリ延紙の三つ折。取直し離さぬ内にせはしくも東の方。方。フシ眺めやり。あれアノ森の木隠を。當麻寺とは申なり。地中將姫の發心も濡れにぞ濡れし尼衣。長徳戀の仇名ときくなれば假にも戀はせま欲しき。戀知らぬ身はむくつけに。玉の盃底なきもの。物の哀れは是よりぞ知るも。知らぬも色の道迷ひ迷ひて行先は。なを隠家のみのへ村知る人。三重里に。着きにける。

地我が庵は三輪の近所を戀しくば。尋ねてこいは辻占の悪い本歌を遠慮して。言はねど氣にはかゝり戸の心細さやさうめんの。機織習ふ白を挽く。姿捨てゝも色と香は背を匂ふ。フシ梅川は。ほつとりものと手間取が尻を叩けば忠兵衛は。地女房自慢の高胡坐。膝に拍子を取らせつゝ。それ女房の尻といつば峯には四季の雪を戴き。麓に止觀の海を湛へ。三世の諸佛出生の門。一切衆生煩惱の。ステテ鬼門に當り。地けるによつて。都の富士とは。フシ名付たり。かゝる尊き靈地なれども。某不思議の機縁によりて。たとへば夜が夜中なりとも。残らず拜み奉る。ア、心あらん人々は。榎や杓子や摺木にて。叩き給へと言捨てゝ。フシ神は。上らせ給ひけりと。地語りしまへば梅川は又大だはけが起つたと。箒を取て追廻れは。おとらが腰に纏り付きゆるせ。くといふ聲も。フシどよみ戯れある所へ。地新七親子立歸り物をも言はずふくれ顔新兵衛奥へ入ければ新七どうど座を組んで。あたり邊りを睨め廻せは。忠兵衛おとらは不首尾にてじんじと下に下りけり。梅川をばから笑止がり。あじやらが過ぎてえいなりの。爰へござれといふ聲

を。力草にて立退けば新七暫し睨み付け。詞コレサ忠兵衛。伺ひ飼ふ犬に手を喰はるゝとはお主がこと。手むかたもない所を。隠まひ置いたる恩の忘れ。何故女房に不義はしかける。上につかれて後悔すなと荒らかに言ひければ。忠兵衛ぎよつとして。是は近頃迷惑千萬。流浪の身となりし以後は。夫婦一ツ所の寢所でも念佛で明すことあり。左様に榮耀な心底は神以て候はず。其上恩有其方の内儀に。蟲なればとて不義すべきや。地罰氣晴しに女房とあじやらが過て此仕合。疑ひやめて給はれと。スエテ理を盡して言ひけれども。詞新七少しも合點せず。いやさあじやらとは言はれまい。其方とおとらが古は許婚の中。枕こそ並べね互ひの心に一物ある筈。地其筋に頼りて言離けんとの巧。恐らく見た眼は違ふまじ。フ返答聞かんと差寄れば。詞忠兵衛聞いてム、さう思ふ心底からは疑ひも尤も。親子の中に違ひは無けれど。地いよ／＼心残らぬとの證據のために改めて暇の状を遣すと。筆さら／＼と染直し。フシ血判添へてさし出せは。新七見もせず引破りム、。詞只今暇をやる迄は。不義しても大事なとの言譯か。梅川などは遊女の果さうした事も有るべきが。身が女房は在所もの。不義仲間へは入れられまい。彌々たはけた言分と氣色を變へて言ひければ。梅川はむつとして。なんと。遊女の果は不義するとや。地お前は甚い粹様ぢや。大和に置くは惜しいこと先程からの御無體を。つく／＼聞てゐますが。どうやら物が有りさうな。ナウ忠兵衛様。御思案は無いかといへば忠兵衛もさうぢやというて打點頭き新七が前へつゝと寄り。詞エ、聞えぬ新七。隠まふまいと思ふなら。何故打明けては言はぬ。我に無名を立つるのみか。女房がこと迄を無念な詞をいうたナア。地其口やめてやりたけれど片時も養はれた。恩がある故のめ／＼とは出て行く。人には報いの有物ぢやと齒を食ひしほり怒りけり。詞新七を知らぬ顔つきにて。如何に女房。厄介人が去なるゝに笠杖やれと言捨て。地奥を指して入る所をおとらは袖に纏り付き。たとへ如何程お心にさはりしことあればとて。それ程までにお二人を。酔う辛うの給ふは。心の底のいぶかしやいふに及ばぬ事なれど。地自らや此方さんの死なうと思ひ定めたる。命二つを伯母様に助けられたる返しぞと。思ふが故

にお二人を。隠かくまふ事ことも　フシ身の祈いた禱たう。何程御馳走申しても。飽足あきたらねども御遠慮ごえんりよが。有りもやせんと朝夕に。手馴たねれぬ業わざをさせますも。お心安やすき爲ためならずや。地人ぢにんにかゝりは物事に心が引かれそつとした。事にもお氣きがまはるもの。憂うれさ忘わすらせん爲ためにこそあじやらいうたり笑わらうたり。戯たはいふも無理ならず。詞ことばお前まへも昨日今日迄も頼母たのしかりしお心の。地ぢに俄にかに變かはり給たまふのは邪見じやけんな奴やつが智惠ちゑ付けて。威おどし居をつたか叱なつたか。たとへ千人萬人の邪見じやけんな者がほむらより。一人ひとなりとよき人に誹いらるゝのを恥はぢ給たまへ。扱あうらめしのお心やとむせ返かへ。りてぞ歎なげきけり。詞ことば新七しんしち眼まなこに角かくを立て。名を取らうより徳取とくるぢや。地ぢあた面倒めんどうなと突倒つたふせば三人目と目を見合せてはつと斗はかりに泣居なたり。地ぢおとらは二人ふたりにさし向むかひ。今の詞ことばの出るからは最早御思案ごしあんおはしませ。邪見じやけんな男持おとこつたゆゑ吾われが心も一ツ所ところかと。思おもはれんこそ。フシ悲かなしけれ。地ぢ今いまお二人ふたりの御難儀ごなんぎも僅わずかの金の過あまちぞや。私わがが嫁入よめいつて居たならば斯か様なことにも成なるまいと。世よのあだ人に馴染なれめて引違ひきだへたるいたづらの。我われを根ねざしに物事が斯かう成なり行いきてお二人ふたりに。憂うれ目見めすると思おもふ故ゆゑ。身に引請ひきまてしみくゝとおいたはしう思おもふなり何處どこに住すせ給たまふとも。頼たのの文ぶんを賜たまへかし。邪見じやけんな夫つまと憎にくければ添そひ果はてうとも思おもはれず。時節ときせふを待ちて宮仕みやつかへ今日けふの辛くるさをお詫わびせん。命いのちがあれば世よの中なかが辛くるう斗はかりもないものぢや。御息災ごしよさいにてましませと。言譯いひわけするも跡あとやさき　フシ亂みだるゝばかり泣なきあたり。地ぢ忠兵衛ちゆうべゑ顔を打守うり夫婦なごが中なかに斯か程迄ほど。違ちがうた心底こころ有あるものか。頼たのむ木蔭こかげに雨漏あめつて。さし行方いざなも覺おぼえねば野原のの土つちとならんより。その情なさけの一詞冥途いつとみどうへの土産みやげにて。いつそ空そらしく成なりなんと涙なみだと共に言いひければ。梅川うめがわ騒さわぐ氣色けしきもなく。まだ此上こゝろにどのやうな。憂うれ目を見んも知れぬ世よに早はやう殺ころして給たまはれと。近くへ寄よれば忠兵衛ちゆうべゑ脇指わきさし抜ぬいて立つ所ところを。地ぢ新七しんしちやがて走り寄より脇指わきさしもいて投なげければ。詞ことば忠兵衛ちゆうべゑ鞆たもとに納なめつゝ。我われ々々此處こゝで相果あひつれば。難儀なんぎのかゝる恐おそろしさに強しひて止とめるか氣遣きよひすな。サア梅川うめがわ一二丁いちにじやう　地ぢそろく歩あめと手てを引ひけば。新七しんしち暫しばしとおしとめ後の障子しょうし引明ひけて。父新兵衛ちゆうべゑの前に畏おそり。羽織うゑをとればこは如何いかに。布子ぬのこの下したの小手こてしばり　フシ皆々みな興きようをぞさましける。詞ことば新七しんしち涙なみだを流なし。地ぢ語るまじとは思おもへども。

死なうと有る故一通りを申すなり。詞今朝よりも親子の者庄屋の方へ呼付けて。兩人の儀を村中が是非胡散などあやしめて。先立て早や飛脚仲間へ概略言うて遣す由。地取逃しては地下中がいかう迷惑することぢや。必ず沙汰を致すなと牛王の裏に判させた。しかし某が心中には。たとへん神罰受くるとも。おのれ早や落さうと思ふ色目を悟つたや。そこで庄屋が智恵自慢。詞新七には孝行者親の難儀を見捨ては。よも方は致まい。兩人を渡す迄とて此如く。地繩をかけて歸せしが。道すがら親人の仰には。汝が我を思ふより親の汝を思ふのは。百倍千倍勝りたり。我が難儀を苦しみて恩ある友に義理缺くな。地此様子をば語りなば先にも此方をかばはれて。落ちまいなどある時は心ざしが無足する。どうぞ恩案を廻らせと。仰られしを尤も同心して。手段の爲の慮外の段さこそ憎しと。フシおぼされん。地夫婦の者は伯母君の陰で延ばはる命なれば。今更人に成り代り如何なる憂目を見るとても。地もとより厭はぬ筈のことゆかりもあらぬ親人が。子の爲にとて年寄の。難儀をしのぎ兩人を。落さんと有る心ざし一禮いうてのき給へと。涙ながらに語るにぞ。こは過分なるお心やと。フシ覺えず。知らず泣きにける。地新兵衛につこと打笑ひ様子は悴が言ふとほり。以前の情今日の恩損徳なしの鸚鵡返し。禮いふことも言はるゝ事も時刻移りて氣遣ひな。夫婦の者も用意して村境まで送りませ。急げくと有りければ。杖笠よといふ所へ物騒がしき足音の。近くなるよと思ふまに捕つた。捕つたと云ふ聲に。續いて大せい駆入りて。兩人共に縛めの。フシ繩取り後より引立つれば。地新七おとら新兵衛は。呆れて涙も出でざりけり。二人は覺悟極めつゝ詞涼しき暇乞ひ。どうで一度は死病腎虚内損勞咳の。いたり病の上を行く戀の刃に圍まれて。女のよれる捕繩に身は繋かれて引かれ行く。隙行く駒に上さし三度びなはの仇煙消えに行く身の道連のなかに哀れも目立たる。黒縮緬の儂さ男狂言。綺語に名をのこす。

右之本遂吟覽頰句音節墨譜等不違毫釐令加節且以著述之全本令校合畢尤可爲正本也。

傾城三度笠終

大坂上久寶寺町三丁目
正本屋 西澤九左衛門 版
作者 紀海音